

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後やや増加し、平成16年は25万1千トンでした。

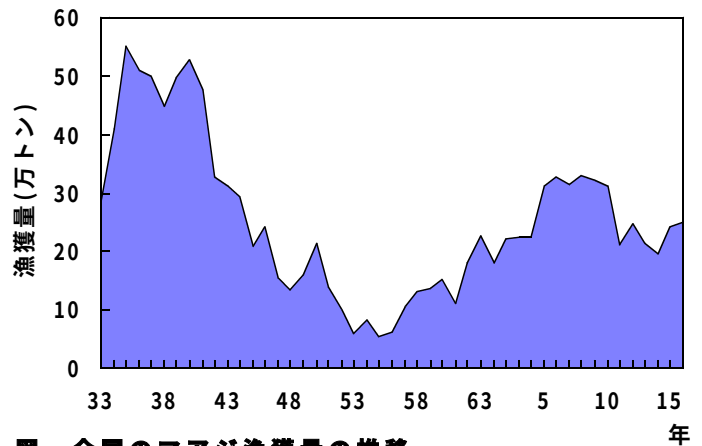


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成18年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、阿久根沖～串木野沖、甑周辺に漁場が形成されました。

薩南海域では、内之浦沖、佐多沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、豆・小アジ(1歳魚・平成17年生まれ)及び中・小アジ(2歳魚・平成16年生まれ)主体に1,268トンの水揚げで、前年の104%及び平年の103%でした。

3. 平成18年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、豆・小アジ（1歳魚・平成17年生まれ）及び中アジ（2歳魚・平成16年生まれ）で、6月以降はアジ仔（0歳魚・平成18年生まれ）が漁獲加入するでしょう。

来遊量は、前年を上回り、平年並みでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

1・2歳魚は、前年低調に推移しましたが、平成18年1月以降は漁況がやや好転し、平年並みに推移しています。

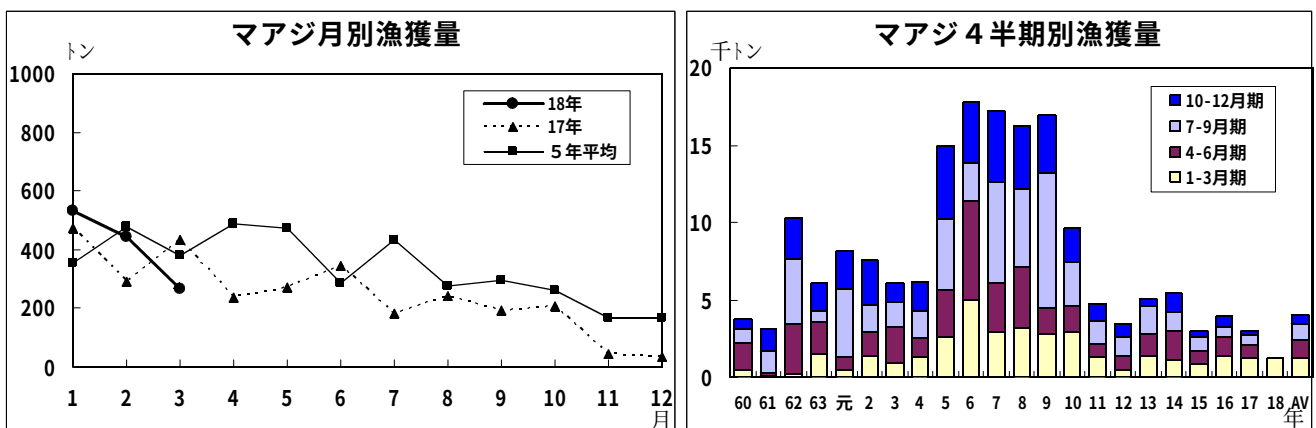


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんが、昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、やや増加し平成16年は33万5千トンでした。

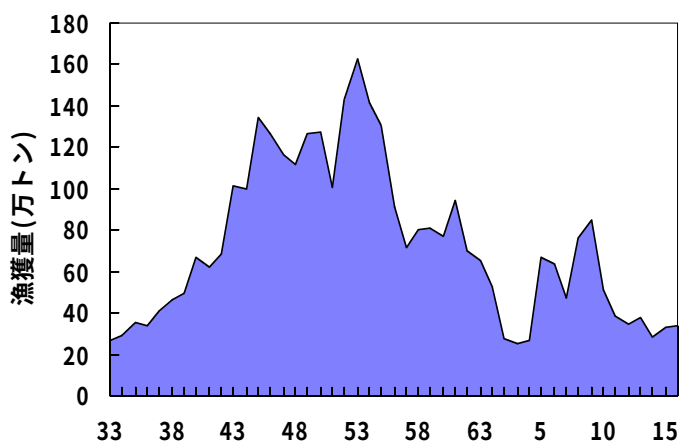


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 平成18年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島西・宇治沖が主漁場となった。

薩南海域では、内之浦沖・馬毛島沖・佐多沖・島間沖・湯瀬が主漁場となった。

4港計では、1～3月はゴマサバ中小主体(2歳魚・平成16年生まれ)及びゴマサバ小・豆(1歳魚・平成17年生まれ)主体に4,949トンの水揚げで、前年の234%及び平年の200%でした。

3. 平成18年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小（2歳魚・平成16年生まれ）及びゴマサバ小（1歳魚・平成17年生まれ）でゴマサバ中・大（3歳以上）も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ2歳魚（平成16年生まれ）は、本県海域への来遊量が高水準であり、また太平洋海域全体で資源豊度が高い年級群（中央水研）であることから、好調に推移すると考えられる。

ゴマサバ1歳魚（平成17年生まれ）は、本県海域への来遊量が高水準であり、今期も引続き好調に推移すると考えられる。一方、大平洋系群（潮岬以東）から来遊は、同海域での漁況経過から前年の1歳魚（平成16年生まれ）よりかなり少ないと考えられる。

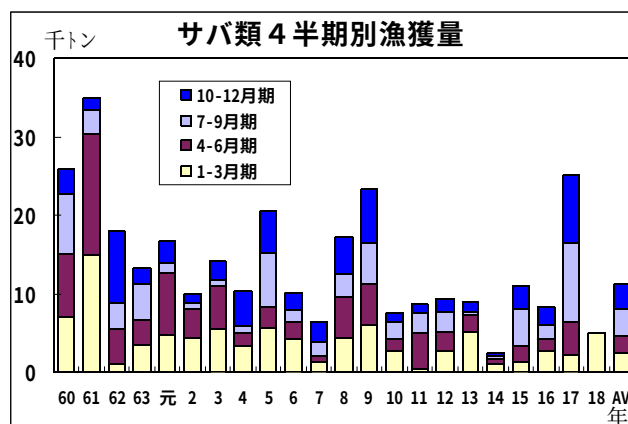
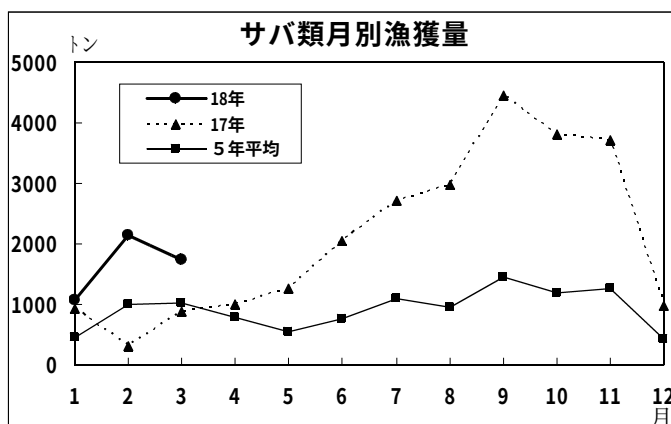


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

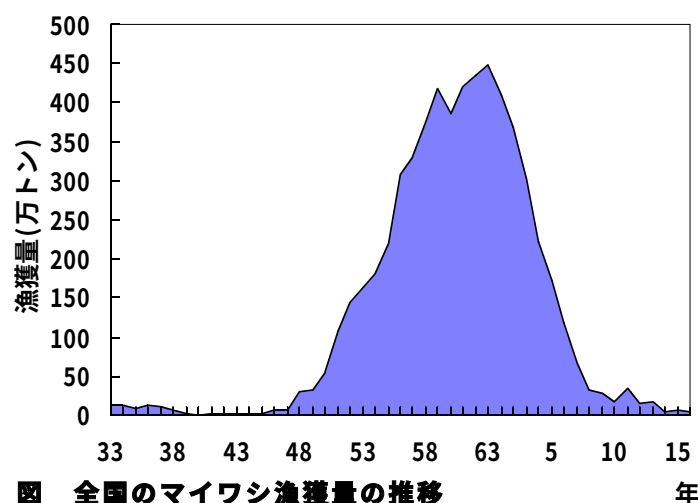
※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は，昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後，昭和48年頃から増加の傾向が見られ，昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし，平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め，その後もマイワシの若齢魚の減少等により，全国的に漁獲量は減少を続け，平成7年には66万トン，平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの，その後減少し平成16年は5万1千トンでした。



2. 平成18年1～3月期の漁況の経過

まとまった漁獲はありませんでした。

3. 平成18年4～6月期の見とおし

まとまった来遊は期待できないでしょう。

（根拠）

マイワシ資源は全国的に低水準にあり，今期のまとまった漁獲は見込めないと思われます。

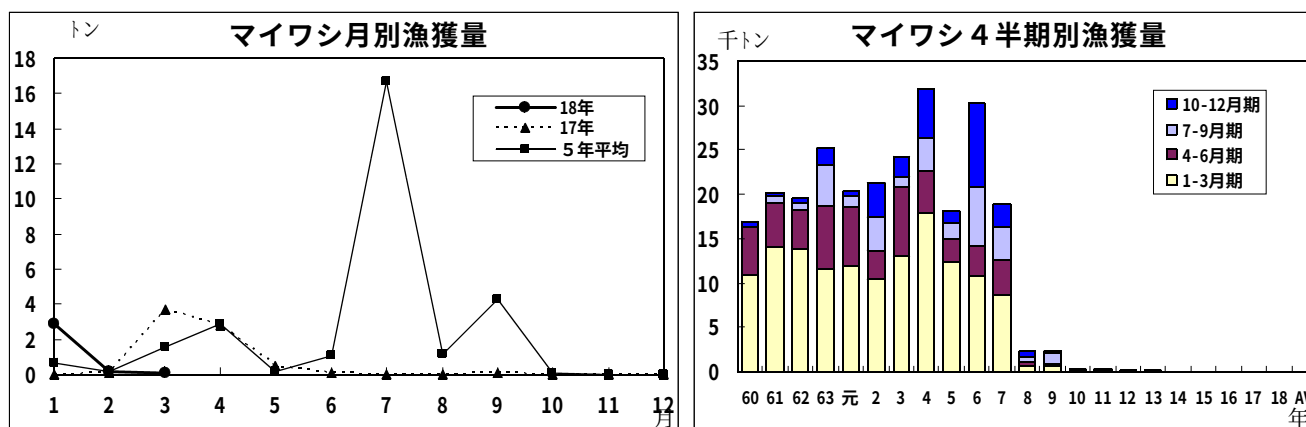


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成9年は5万5千トン、平成16年は3万2千トン

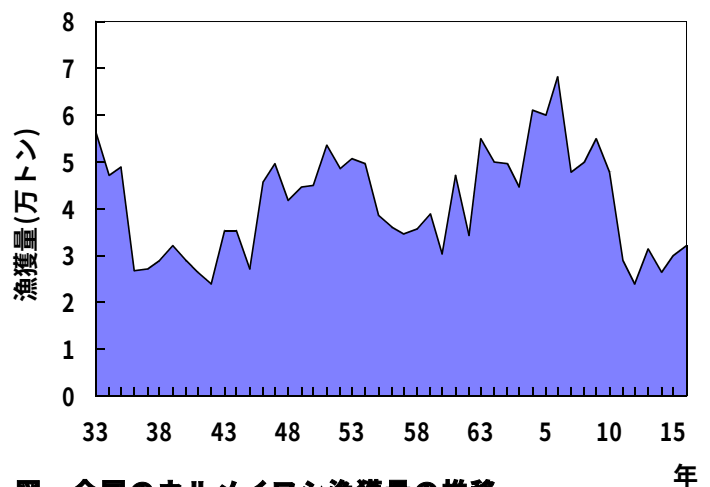


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成18年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）の巻き網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で185トン（前年比184%，平年比167%），北薩海域の棒受網で15.2トン（前年比86%，平年比34%）と、まき網では前年，平年を上回り，棒受け網では下回りました。

薩南海域における漁獲が比較的好調に推移しました。

3. 平成18年4～6月期の見とおし

中～大羽銘柄(1歳魚・平成17年生まれ)が漁獲の主体で，平年を下回るでしょう。

（根 拠）

今期の主漁場となる県北部海域では，周辺海域の1歳魚（平成17年生まれ）の資源量が低水準であると考えられ，来遊水準は高くないと考えられます。

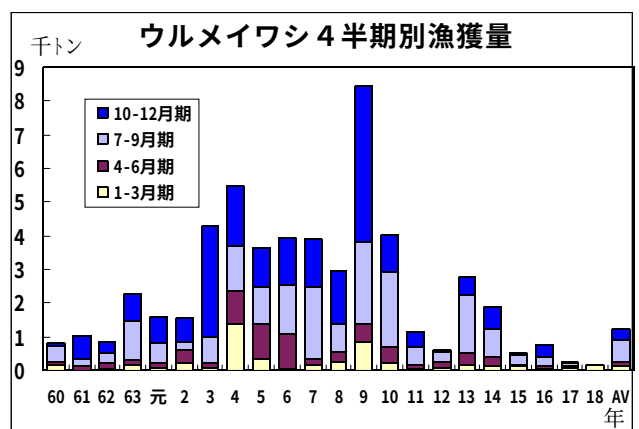
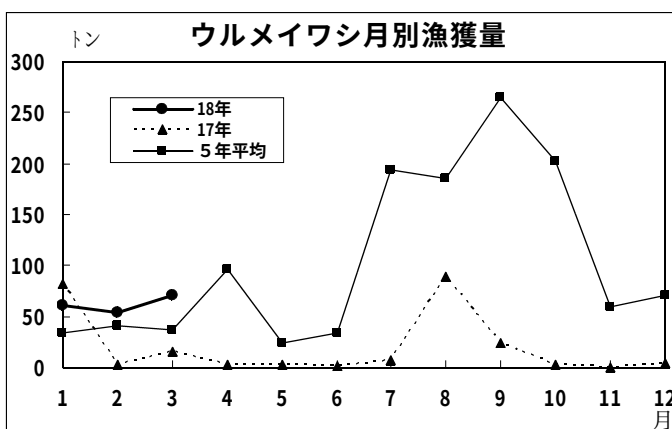


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し平成9年は23万3千トン、平成11年は48万トンとなりました。平成13年は、30万トンと一時的に減少しましたが、平成14年は再び増加し44万トン、平成16年は過去最高の49万8千トンでした。

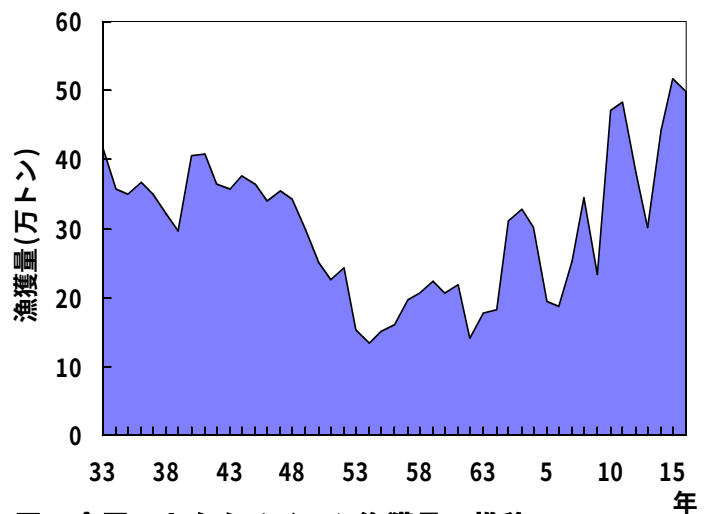


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成18年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で381トン（前年比51%，平年比155%），北薩海域の棒受網で161.8トン（前年比98%，平年比144%）の水揚げで、まき網では前年を下回ったものの、平年を上回り、棒受け網では平年を上回り、前年並みの水揚げでした。

3. 平成18年4～6月期の見とおし

中～大羽銘柄(1歳魚・平成17年生まれ)が漁獲の主体で、平年を上回るでしょう。
(根 拠)

本県海域に来遊するカタクチイワシの資源量は増加傾向にあると考えられていることから、来遊水準は高いと考えられます。

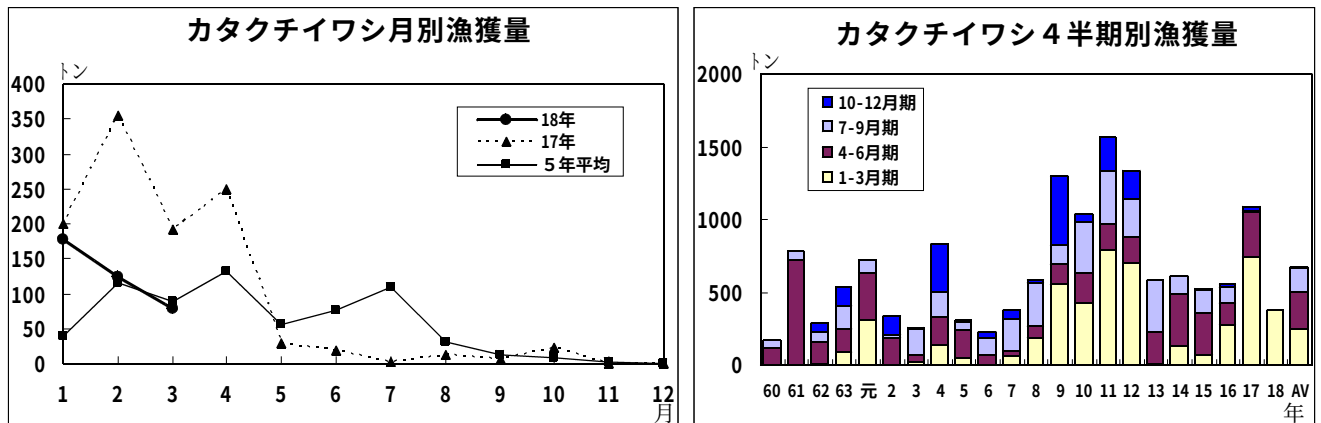


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚量を使用。

【その他の魚種】

〈ムロアジ類（４港計）〉

1. 経年変化及び平成18年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年以降はやや増加し、平成14年には4,418トンとなりましたが、その後は減少し平成17年は1,675トンとなりました。

平成18年1～3月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では442トンの水揚げで、前年の80%及び平年の50%でした。

2. 平成18年4～6月期の見とおし

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

〈オアカムロ（４港計）〉

1. 経年変化及び平成18年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成17年は1,165トンとなりました。

平成18年1～3月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では612トンの水揚げで前年の177%及び平年の105%でした。

2. 平成18年4～6月期の見とおし

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

〈マルアジ（アオアジ）（４港計）〉

1. 経年変化及び平成17年4～6月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。その後減少し、平成17年は307トンでした。

主に西薩海域で漁獲があり、期全体では12トンの水揚げで、前年の7%及び平年の2%でした。

2. 平成18年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小（1歳魚・平成17年生まれ）、マルアジ中・大（2歳以上）となるでしょう。

来遊量は低調であった前年並みで、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

前期までの漁況経過からマルアジ小（1歳魚・平成17年生まれ）及びマルアジ中（2歳魚・平成16年生まれ）の来遊量が低水準であります。

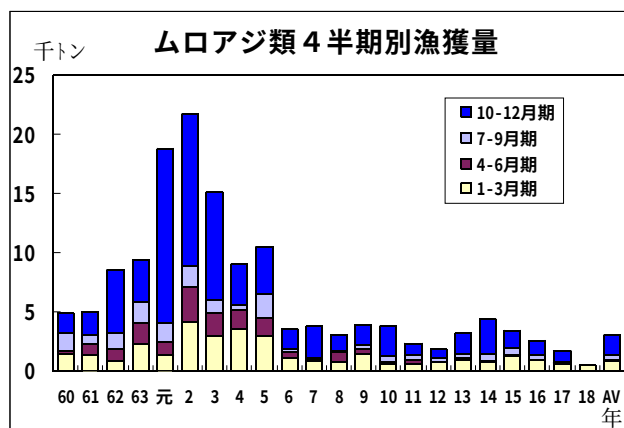
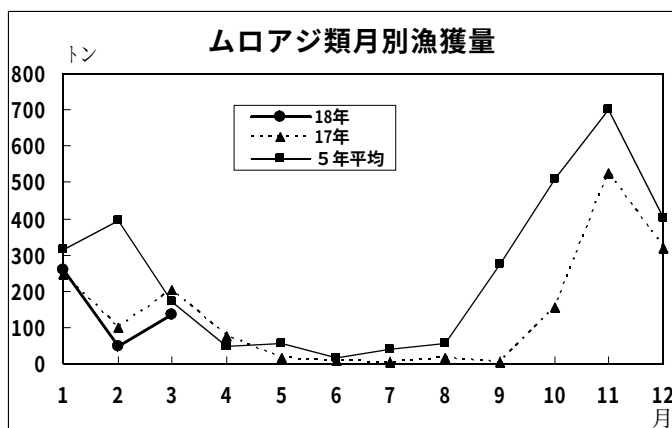


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

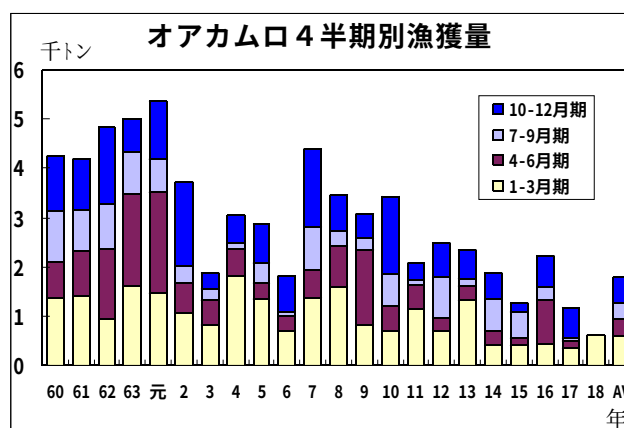
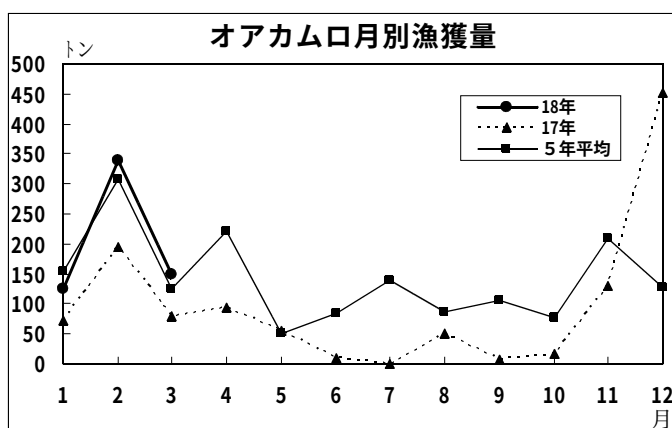


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

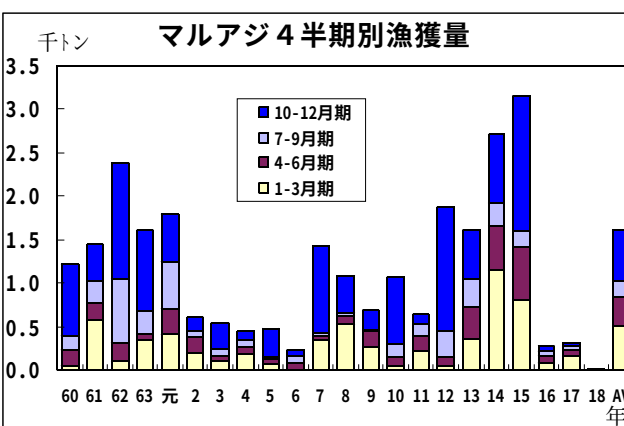
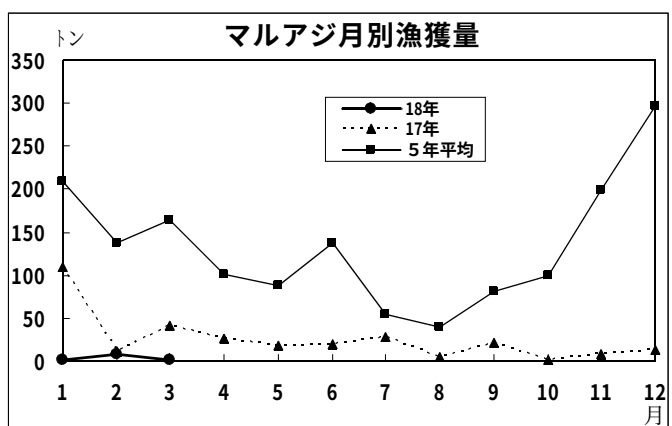


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成13~17年)の平均値, 平成18年3月22日までの水揚量を使用。

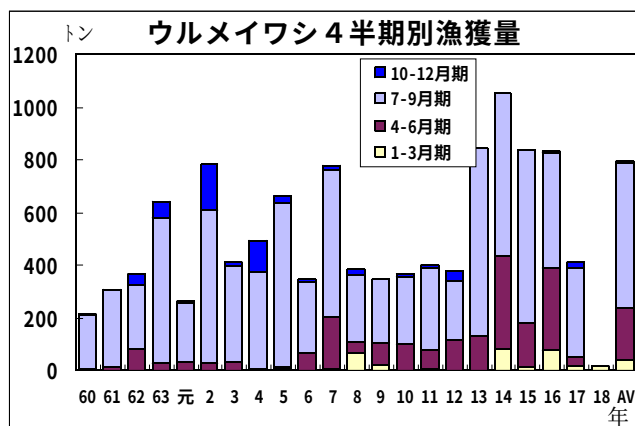
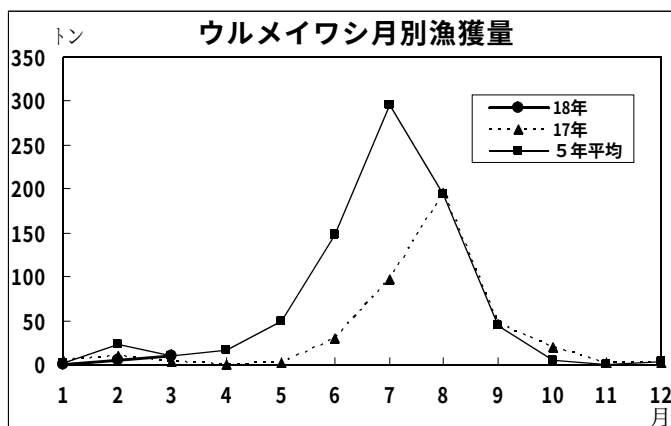


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

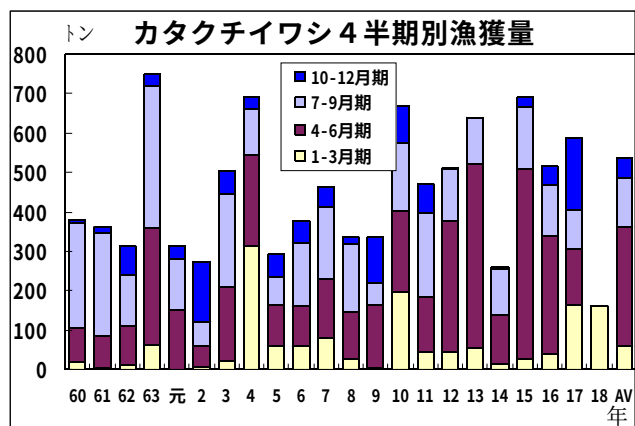
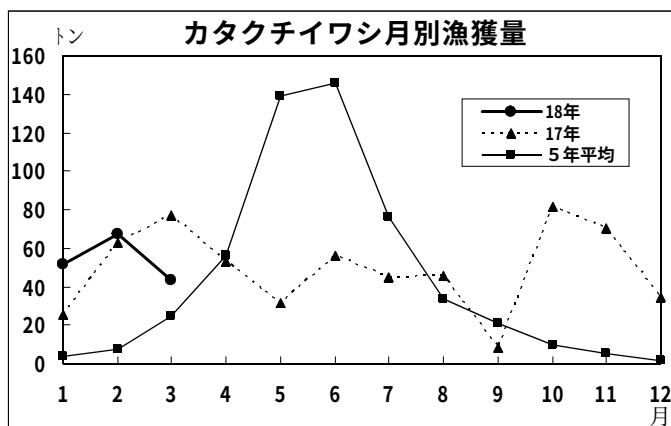


図 カタクチワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

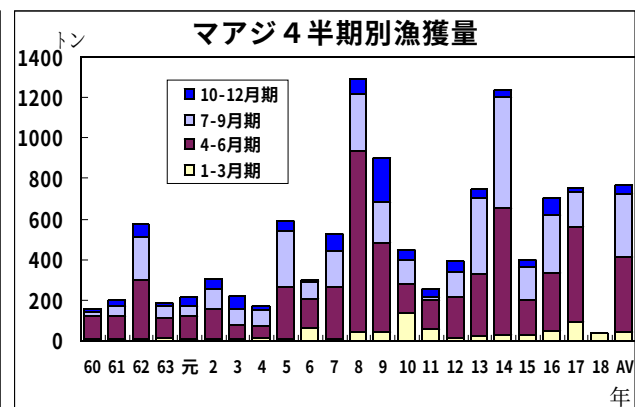
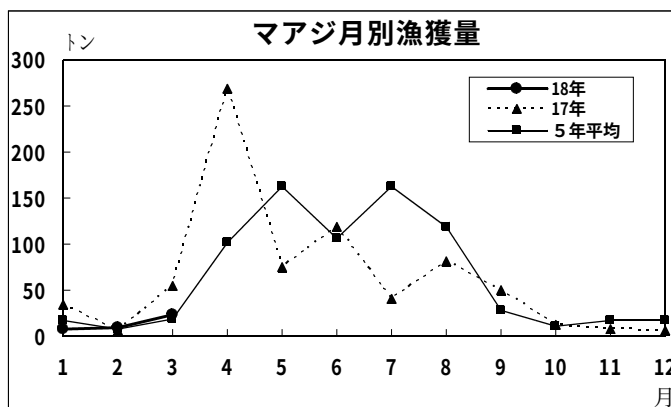


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年3月22日までの水揚量を使用。

[シラス]

1. 経年経過及び平成18年1～3月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の6,060トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14、15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。平成16年は3,507トンと好漁の年となりました。志布志湾海域では平成12年の1,407トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年は842トンまで増加し、平成16年は1,204トンと比較的好漁の年となりました。

1～2月の集計で西薩海域では、カタクチシラス主体に17.7トンの水揚げで、前年の19%、平年の20%でした。志布志湾海域（一部未集計）では、カタクチシラス主体に29トンの水揚げで、前年の209%、平年の120%でした。3月下旬以降、各地で春漁が本格化し始めました。

2. 平成18年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、カタクチシラスでしょう。来遊量は、西薩海域で、平年並か平年を上回り、志布志湾海域では平年並みか、平年を下回る可能性もあります。

（根 拠）

西薩海域ではカタクチイワシ親魚の来遊が、本年1月以降、北西薩海域を中心に好調に推移していること、本年3月に実施した卵稚仔調査結果から、カタクチイワシの卵や稚仔魚の分布が、近年では平均をやや上回る水準であったことなどから平年並みか平年を上回ると考えられます。志布志湾海域では、今後の親魚の来遊を注視する必要があると思われます。

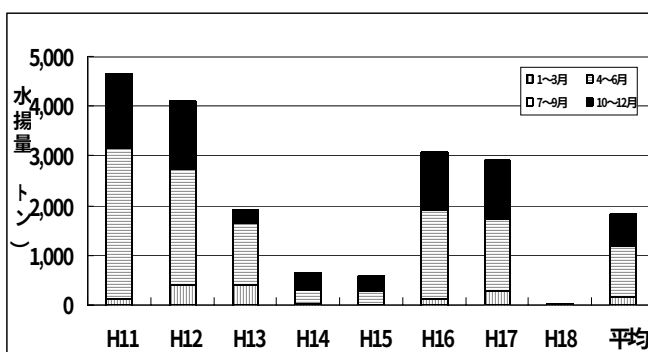
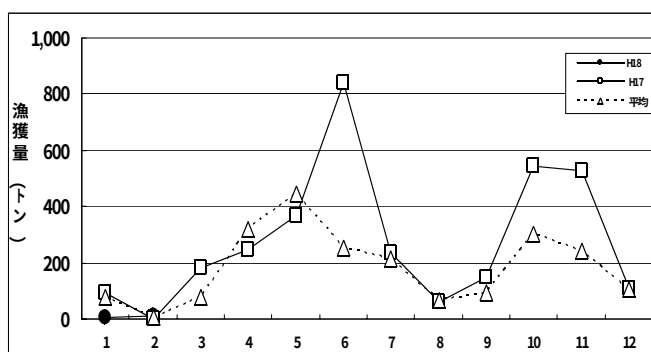


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年2月までの水揚量を使用。

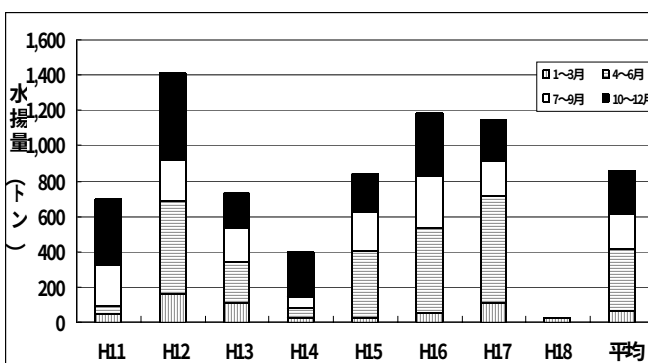
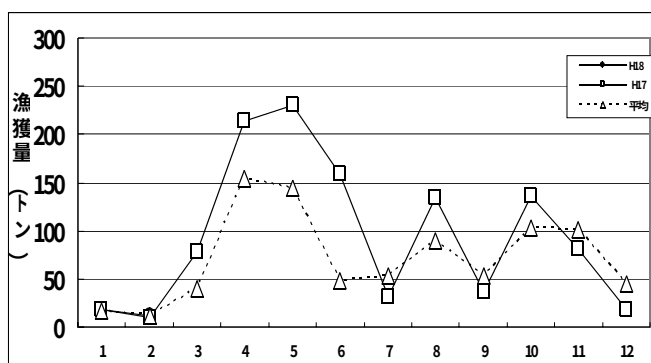


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年2月までの水揚量を使用。